歴史の傍観者

坂巻くれは

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
歴史の傍観者

【Ｎコード】
Ｎ８２８８Ｊ

【作者名】
坂巻くれは

【あらすじ】
栃木から両親の仕事の都合で東京に引っ越してきた由記は、クラスメートと距離をとっていた。
ある日、図書当番の仕事をやむなく一人でやることになった由記は、図書室で不思議な体験をする。

～少女と子鬼の出会い～

現代の日本国。この国で最も賑わいをみせている東京では、深夜になっても明かりが完全に消えることはない。

そんな東京という街に、私こと落合由記（おちあいゆき）も住んでいた。

生まれは栃木県なのだが、先月両親の仕事の都合でこの東京に引っ越してきたのだ。

私としては、東京よりも生まれ育った栃木のが良かった。空気はこんなに汚れていないし、空も広く見える。何より、栃木は星が綺麗だった。

ここと比べると、全く違う。田舎と都会の差、というやつだろう。

栃木に住んでいたときの中学の友達は、みんな私が東京に住むということを知って羨ましそうな目をしていた。

都会なんかのどこがいいのだろう。私にはさっぱりわからない。

そんな都会嫌いの私だから、転校した先の中学でも馴染めずにいた。いや、クラスメートたちはそれなりに頑張っていた。私を話の輪に入れてくれようともしたし、親切にも学校の中を案内してくれようとした。

けど、そんなクラスメートたちの親切に私は答えなかったのだ。別に新しい友達が欲しくてこの都会に引越してきたわけじゃない。友達なら栃木にいる。

そんな私の性格をわかってきたのだろうか、親切と称して私にいろいろ構っていた連中も、次第に私を気にかけなくなった。

正直、清々した。一人のが楽だから。

一人は孤独だという人もいるかもしれないけど、なら孤独で構わない。誰かと必要以上のコミュニケーションをとるのは面倒だから。

私はそういう人間だ。面倒は嫌い。

だから、私は今日も一人だった。給食を食べるのも一人だったし、

登下校も一人。
私はこれからもずっと一人で学生生活を過ごしていくんだろうと、そう思っていた。

＊　＊　＊

「落合さん、悪いんだけど、今日図書当番行けなくなっちゃったんだよね。一人でも大丈夫？」
この中学では委員会への参加は絶対だった。もちろん転校生の私も例外ではない。ちょうど人数に空きがあったということで、私は図書委員に任命されたのだった。
今日はその図書委員の当番がある日で、先ほど声をかけてきたのはその図書当番を一緒にやることになっていたクラスの女子。確か名前は雨槻さんといったか。
大方友達に遊びにでも誘われて断れなかったのだろう。私に仕事を押し付けて遊びに行くつもりらしい。まあいいか。
「うん。大丈夫だよ」
私は作り笑いを顔に貼り付けてそう返した。
「そっか、良かった。ごめんね。じゃあ代わりに今度の当番は私が全部やるから、今日はこれで失礼」
意外に雨槻さんとやらは、義理堅い人間だということを知った。
どうやら今の感じだと、友達と遊ぶというわけでもなかったようだ。塾か何かあるのだろうか。失礼な勘違いをしてしまったことに少し反省しよう。

さて、図書当番は私だけだ。放課後の当番なので、きっと下校時刻の６時までやらされるのだろう。とはいっても担当の先生はこっちの様子を見に来るわけでもなく、どうせ職員室でコーヒーでも飲みながらくつろいでいるのだろう。
この学校の生徒は、放課後図書室を使うことはほとんどない。だ

から、私としてはサボっていてもバレないし、良い時間潰しにはなるのだ。

職員室から図書室の鍵を借りて、そのまま同じ階にある西の突き当たりの部屋を目指す。そこが図書室なのである。

中は少し埃っぽい空気が漂っていた。きちんと掃除しているのか問いたくなる。

薄暗いので電気をつけようと、スイッチを押す。が、カチッという効果音が聞こえるばかりで部屋に明かりがつく気配はない。

「ブレーカーが落ちてるってわけでもないだろうに」

停電というわけでもないようだ。窓の外に見える職員室は普通に明かりがついているのだから。

「おかしいな。仕方ない、先生呼んでこよう」

と、出口に向けて足を一歩踏み出した瞬間だった。

『そなた、鬼になる気はないか？』

小さく、聞き取れるか聞き取れないかの本当に小さな声が、私の背後から聞こえた。

声の主の姿を見ることは出来ないが、きっと私よりも少し年下、おそらく小学生くらいの少年と少女の声だということは把握できた。

『そなた、鬼になる気はないか？』

今度ははっきりと、私の後ろで声がした。

私は恐怖で後ろを振り向けずにいる。

だって、この図書室には鍵がかかっていたのだ。それに、私がこの部屋を開けたとき、中には他に誰もいなかったというのに。

『申し遅れた。我等は母神様の命により、歴史を見届ける役目を背

負った子鬼』
「我は那智という」
「我は出雲という」
『我等、歴史を傍観する双子なり』

わけのわからないことをべらべらと。少しだけ腹が立ったので、後ろを振り返って文句を言おう、と思ったのだけれど、私は振り返って絶句してしまった。

「――つ、角？」

後ろに立っていたのは少年と少女。やはり私よりも少し年下くらいだ。けれど、この二人には普通の人間では考えられないような部分があった。

一つ、角。額から生えた、一対の角。二つ目に髪の色。鮮やかな、決して染色だけでは出ないであろうその緋色。そして最後に瞳の色。彼等の目の色は白かった。決してカラーコンタクトではないと、これは私の直感。

その異形の者達は再度、私に向かって問うた。

『そなた、鬼になる気はないか？』

その表情は、満面の笑みだった。

～少女と子鬼の出会い～（後書き）

gdgdな始まり方ですみませんですｏｒｚ
これから少しずつ歴史っぽい要素を出していこうと思います。

～少女と子鬼の口論～

放課後の埃っぽい図書室。そこで出会った不思議な……というよりは若干不気味だといった方が良いかもしれない。そんな双子の子供。

いや、ただの子供じゃない。自身から名乗っている通り、「鬼」らしい。額からの角がそれを証明している。

『そなた、鬼になる気はないか？』

ぴったりと揃う声。少年と、少女。緋色の髪が風もないのに揺れていた。

『どうした。答えぬか』

これまた気持ち悪いくらいにぴったりとハモっている。

答えろ、と言われても困る。

「兄様（あにさま）、この者我等に怯えているのでは？」

少女の方が少年の方に言う。

「人間の子よ、怯える必要などないぞ。我等は害など与えん」

人間の子って。私はこれでも１４歳で、この子達はどうみても１０歳から１２歳くらいにしか見えないのだが。

それなのに上から目線って、一体どういうことだ。

『ほれ、何か答えてみよ』

子供特有の無邪気そうな笑みを浮かべ、相変わらずの上から目線で自称鬼は言った。

「あの、」

やっと私が喋ったのが嬉しいのか、鬼は顔をぱぁっと綻ばせる。

「わたしは人間のままで良い」

一応答えろと言われたから答えたのだ。

この目の前にいる自称鬼どもがたとえどこかの神様だろうが精霊だろうが本当に鬼なのだろうが、そんなことは別にどうだっていい。好きにしてくれ。

けど鬼にならないかと問われても、そんなの私にとって何のメリットにもならないし、それどころかデメリットだろう。

面倒事に首を突っ込むのは更々ごめんだ。ややこしい話は勘弁してくれ。

「ということでとりあえず消えてくれ、鬼」

もうこの話は終わろうじゃないか。鬼よ、他を当たってくれ。オカルト好きな奴は意外にもこの学校多いんだぞ。オカルト同好会なるものもあるくらいだしな。

『鬼に、なってはくれぬのか？』

これまた声をぴったり揃えて言う。ああもう、そのハモり具合は最高だと褒めてやる。だからもう良いだろう。私の前から早く消えてくれ。図書当番という名目の読書おサボりタイムが私を待ってい

るんだ。

『母神様(ははがみさま)が、悲しむぞ』

誰だよ母神様って。そんな人知りません。いや、人じゃなくて神様？まあどちらにしろ私はその母神様っていうお方を存じ上げぬのさ。

私のママンは口うるさい元銀行員の唯子さんだけで十分なのだよ。

『帰って、母神様に大層怒られるのであろうな。我等は』

そんなの知ったことか。とまでは流石に言わないが、まぁ心中お察ししてやるからとりあえずお帰りください。

『そなた、本当に鬼に――』

ブチっ。頭の中のどこかの配線が切れる音がした。

「しつこい。私は面倒なことが嫌いなの。たとえば私がその君たちと同じ鬼とやらになったとして、そこで私には何のメリットもないだろう？メリットのないことは私にとって面倒でしかないのさ。面倒は嫌いだ。君らが何でそこまで私に対して執着するのかは知らない。いや、知りたくもないんだけど、その母神様とやらには申し訳ないと伝えてくれ。じゃ、あでぃおっす」

少々酷い対応だったかもしれない。が、変な物語に巻き込まれるのはごめんなんだ。このくらい冷たく言ってやらないと、向こうも諦めてはくれないだろう。

『我等がそなたに執着するのにはちゃんとした理由がある』

「理由とか言う前に、人にお願いするときはちゃんと敬語で話せ。私は君らよりも年上だぞ」

『そなた、いくつじゃ』

「１４だけど」

『ふん、小童め。我等はこの星が出来た直後に母神様によって生み出されたからな。当然そなたよりも生きている時間の桁が違う。この場合、そなたが敬語を使うべきであろう』

子供の姿でそんな壮大なスケールの話を語られても、説得力の欠片もないのだが。

「今のこの世は外見年齢がものをいうんだよ」

『そんなの屁理屈じゃ。っと、そんなことを言い争いにきたのではない。そなたに鬼になってほしい理由があるのだ』

理由なんかどうだっていい。

もうどうでも良いから、この口うるさい鬼どもを早く消し去りたい。今なら私の全財産１５６０円でスナイパーを雇ってやってこいつらを殺させてもいい。

っていうか１５６０円で雇われるスナイパーって、一体どんなんだ。

『そなた、この部屋にある書物の中で「九神失踪伝」というのを読んだことはあるか？』

双子の片方、少女――確か名前は那智(なち)と言ったか。那智は部屋の奥の棚にあった一冊の本を私の手元に持ってきた。

一体この本が何だっていうんだ。

～少女と子鬼の口論～（後書き）

はい、申し訳ないっす。若干ギャグに走った自分を悔やんでます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8288j/

歴史の傍観者

2010年10月9日04時19分発行